

七夕豪雨で断裂した富士川谷の北山溶岩流I：  
逢来橋活断層(仮称)：地学散歩(10)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 賢之輔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025713">https://doi.org/10.14945/00025713</a>

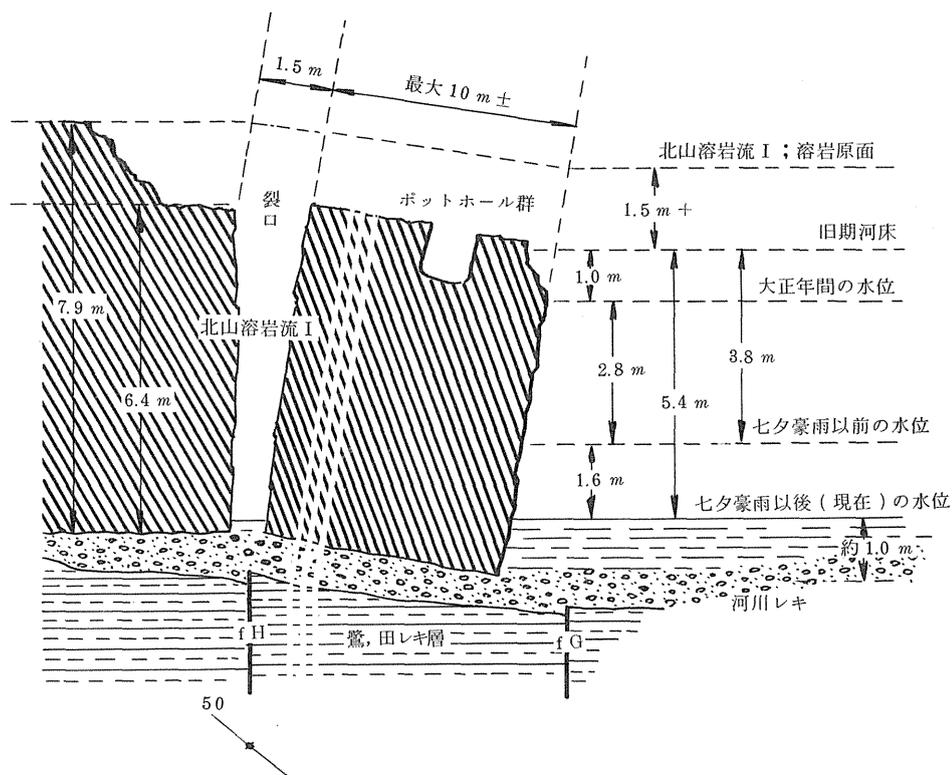
# 七夕豪雨で断裂した富士川谷の北山溶岩流 I 逢来橋活断層(仮称)

地学散歩(10)

小川 賢之輔\*

台風8号が梅雨前線を刺激したために発生した1974年7月7日のいわゆる七夕豪雨は、富士火山周辺域にも幾つかの爪跡を残していった。

かつて「静岡地学(1972)第21号、地学散歩(3)」で紹介した、富士川左岸の富士宮市沼久保部落付近に分布する、新富士火山旧期の北山溶岩流 I (富士市域の入山瀬溶岩流に相当する)の溶岩原(かつての富士川の河床)が、河岸に沿って延長約170 mにわたり、真っ二つに裂け、標式的な瓠穴(ポットホール)群が、ほとんどすべて、原型をとどめないまでに、無惨に破壊されて、壊滅にひんしている。



図A 逢来橋断層(仮称)模式図

fH : 逢来橋断層 fG : 月代断層

裂口は恐らく溶岩層を下面まで完全に切断しており、幅1 mないし3 mに開口して、巨視的には一直線にN 50° W・垂直の走向・傾斜で走っている(27ページ:地質図参照)。

この断裂形成の主因は、溶岩流に覆われて(下位の鷺ノ田レキ層を切って)存在する、活断層の逢来橋断層(仮称)であり、断裂の引き金となったのは、七夕豪雨による増水が、河岸の溶岩の足下を洗って掘り下げ、岩壁を打撃したことによるものであろう。しかしながら断裂の生長を著しく助けたのは、溶岩に発達する鉛直方向の柱状節理と、川砂利採取が主因と思われる河床の著しい低下と推察される。

(26ページ:小川賢之輔、閑人閑語、参照)

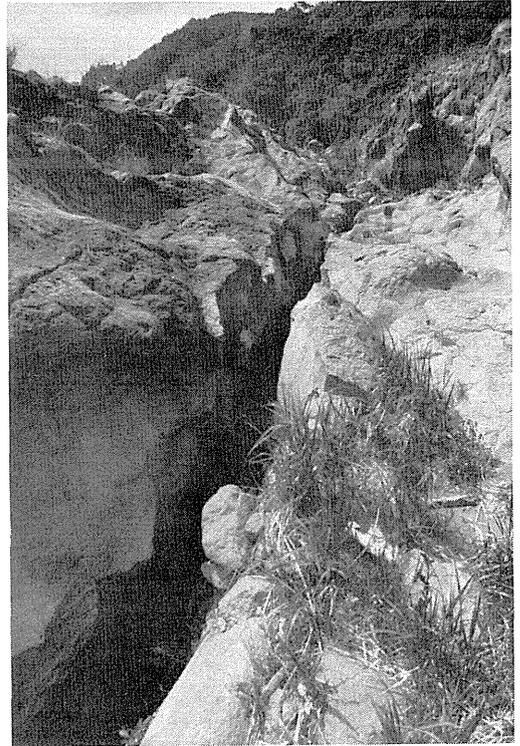
\* 富士市



逢来橋断層による北山溶岩流Ⅰの断裂：下流の遠景は逢来橋および岩淵火山群



異変の発生した北山溶岩流 I の露頭



上流方向の断裂



断裂による開口：右前方は羽鮎丘陵



下流方向の断裂



崩壊寸前のポットホール群